
ピター・チョコレート 一年生たちのバレンタイン

奇天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビター・チョコレート 一年生たちのバレンタイン

【著者名】

奇天

N3281F

【あらすじ】

バレンタインイベントで盛り上がるリリアン文学園。女の子の特別な一日をめぐって、一年生たちの想いはそれだけれど、みんな最高の思い出を作るために精一杯過ごしていた。

(前書き)

『クリスクロス』から『あなたを探しに』までが舞台でネタバレを含みます。

ビター・チョコレート

一年生たちのバレンタイン

それは女の子にとって特別な一日。ありつたけの気持ちを想いを込めて包み込んで最愛の人へ届ける儀式。

聖バレンタインデー。

リリアン女学園の生徒たちにはさらに素敵なイベントが用意されている。待ち焦がれていた日を目前に、初体験となる一年生たちはちよっぴり右往左往。その日をどう過ごすかは人生の一大事つてくれるみんな真剣に思っているから。

1

「ちょっとよろしいかしら」

休み時間。乃梨子はクラスメイトたちから呼び止められた。慌しい毎日ではあるが、休み時間すべてが忙しいわけではない。だから、つい頷いてしまった。

彼女たちの顔を見てから乃梨子は後悔した。声を掛けただけなのに、どの顔も意を決したような表情を浮かべていた。思えば、普段の声の調子と違ったのだから頷く前に気づくべきだった。

わざわざこうして呼び止めたということは、ただの雑談ではないだろう。乃梨子に、あるいは白薔薇のつぼみへの質問やお願いであることが、これまでの間もなく一年となるリリアン女学園での体験

から分かっていた。そして、その質問やお願ひは乃梨子にとつてやつかいなことが多いことも。

とはいっても、いつたん頷いてしまつた以上むげに断るわけにもいかない。気持ちを切り替え、志摩子さんを見習つてにつこり笑つて対応することにした。

「何かしら」

クラスメイトは三人。最初に声を掛けた真ん中の子が言った。

「私たち、乃梨子さんにお願いしたいことが」

首をかしげてみせると、彼女が説明しだした。

「実は、バレンタインデーに紅薔薇のつぼみにチョコレートをお渡ししたいのだけれど、受け取つてくださるかしら、と私たちお話ししていまして」

その言葉にあとの一人が続く。

「バレンタインデーといつたら、宝探しのイベントでお忙しいでしょうし……」

「お噂では、紅薔薇さまはチョコレートをお受けにならないと聞きましたし……」

乃梨子は少し驚いた。たしかにバレンタインデーが間近に迫つているからタイムリーな話題ではある。しかし、白薔薇さまの話ならともかく、祐巳さまのことは管轄外だろう。

「それで、私にお願いとは？」

三人は祈るように両手を前で合わせて乃梨子を見上げるよう見つめた。

「もしよろしければ、紅薔薇のつぼみに伺つてくださらないかしら」なんとも図々しいようなお願ひに聞こえる。乃梨子は右手で髪をかき上げ、そのまま視線を宙にさまよわせた。

「だつて、薔薇の館にいらっしゃる一年生は乃梨子さんだけなんですもの」

「うーん……」

思わず唸つてしまふ。

自分たちで祐巳さまご本人に尋ねるのが筋というものだ。でも、普通の一年生にそれを求めるのは酷というものだろう。そもそも、そんなことができるならはじめから堂々とチョコレートを渡すだろう。

他に適任がない以上、乃梨子にこの話をするのも理解はできる。でも。

教室を見渡すと、視線は本を読んでいる友のところへ止まった。瞳子が祐巳さまにチョコレートを渡すとは考えにくい。また、クラスメイトたちが無邪気に祐巳さまにチョコレートを渡したからといって動搖したりはしないだろう。けれども、心の中まで平然としているられるだろうか。

「ごめんなさい」

断る理由を思いつく前に口から出てしまった。

別に乃梨子が彼女たちのお願いを聞かなかつたからといって、祐巳さまがチョコレートをもらわないことにはならないだろう。それでも片棒を担ぐようなことはしたくなかった。

普段の乃梨子からはほど遠い冴えない説明でクラスメイトたちを納得させるのに休み時間をまるまる使つてしまつたが、むしろすつきりした気持ちだった。

2

中等部にいたころ高等部になれば素敵なバレンタインデーを過ごせると単純に思っていた。でも、それはお姉さまがいてこそと気づいてしまつた。

クラブ活動などで上級生と接する機会がないときつかけがない。普段はほとんど感じないけれど、いつしたイベントの時には姉のいる同級生を羨ましく思った。

そんな美香にも憧れの人はいる。

紅薔薇のつぼみ。

ちよつと近寄りがたさを感じる山百合会の幹部の中で、親しみやすさを漂わせている祐巳さまは多くの一年生に慕われている存在だ。見た目も特別な他の方々と違い、祐巳さまはパツと見は普通の生徒に見える。

自分が特別ではなく普通の生徒であると自覚している人にとって、ああいう人になれるといいなという存在だった。美香も自分が普通で平凡な一生徒に過ぎないと強く自覚している一人である。

高等部に進んでいつから祐巳さまのことをそう感じていたかは思い出せない。いつの間にか紅薔薇のつぼみを気にかけるようになっていた。それからは事あるごとに観察するようになり、分かったことがあった。

最も近づけそうな存在でありながら、やはり他の普通の生徒にはないものをお持ちだと。山百合会の幹部の方々が夜空に輝く星ならば、祐巳さまは晴天の空にきらめくお日さまだ。

美香はバレンタインデーに祐巳さまにチョコレートを渡したいと思っていた。

どんなチョコレートを作ろうかと悩むことは決して苦ではない。どんなラッピングをしようかと悩むことも同様だ。こうしたことを見い悩む時間は、幸せの成分からできているから。

でも、美香に違う悩みができてしまった。

休み時間、クラスメイトたちが白薔薇のつぼみである乃梨子さんにお願いしているのを聞いてしまった。席が近かつたから、聞こえてしまつたのだ。

考えてみれば、もっとも大切なことである。どうやってチョコレートを渡すのか想定していなかつたなんて。

紅薔薇さまがチョコレートをお断りしているといつ話も初耳だつた。慌ててクラスメイトにそれとなく尋ねて確認したくらいだ。紅薔薇さまを敬愛なさつている祐巳さまが紅薔薇さまのようにチョコレ

レートをお受け取りにならないという可能性も捨て切れない。

それに受け取つてくださるとしても、いつどこで渡せばいいのだろう。いつも眺めているだけだった美香が祐巳さまに話し掛けるなんてできるだろうか。

幸せの成分は吹き飛んで、憂鬱な悩みだけが残つてゐるようを感じた。ずつしりと重いため息をついて、どこかに解決の糸口がないかと頭の中の隅々を探し始めた。

3

バレンタインイベントの準備で薔薇の館に向かうのはほぼ日課となつていた。妹オーディションの時以来のことである。

田出実は一年生の新聞部部員である。お姉さまが『リリアンかわら版』の編集長であることもあって、他の部員よりも薔薇の館で過ごすことが多い。薔薇の館のメンバーで一年生は乃梨子さん一人だけなので、一人でちょっとした雑談をする機会がたびたびあつた。

姉の真美さまは紅薔薇さまのつぼみ、黄薔薇さまのつぼみお一人とクラスメイトで普段から交流も多い。先代の編集長の三奈子さまのころは新聞部は山百合会と緊張関係にあつたと聞くが、今はいい関係を築けている。どちらがいいかは分からぬが、乃梨子さんと親しくすることは悪いことは思わない。

(そんな打算ばかりじゃないけれど)

田出実は乃梨子さんと一緒に、ちょっとしたお使いに行くところだつた。

「そういえば」

田出実は乃梨子さんに話し掛けた。

「乃梨子さんは白薔薇さまにチョコレート渡すよね?」

それから慌てつけ加えた。

「取材じゃなくて雑談ね」

この質問に乃梨子さんはちょっと複雑な表情を浮かべた。何かあ

るのだろうか。

「うん。渡す予定」

「何かあった？」

「あー、別にたいしたことじゃないんだけど……」

「そう言つたものの言葉が続かない。まだまだ信頼関係の構築には時間が掛かるということか。

「クラスメイトから、祐巳さまがチヨコレートを受け取つてくださるか聞いて欲しいって頼まれてね」

お使いの帰り道に唐突に乃梨子さんが言つた。さつきの続きなんだろう。

「それって、乃梨子さんに頼むのって筋違いなんじや」

田出実は思つたままを口にした。

「うん。だから断つた」

「そう断言したのに、すつきりした表情とはほど遠い。何か思つところがあるのだろう。」

「私は……どうしようかな」

「えつ！ 渡さないの？」

乃梨子さんが立ち止まつて驚いてくれたことに驚いた。なんとなく言つたことなのに。

「うちは普通の姉妹というより、編集長とその部下つて感じだしね」「周りもそう見ているだろう。血肉共に認めるつてやつだ。

「でも、渡したいんでしょ？」

乃梨子さんがすばりと聞いてくる。そう聞かれれば答えないわけにはいかない。

「うん、まあそうだけれど」

「だったら決まりじゃないかな」

ちょうど薔薇の館に着いた。扉を開けて中に入る前に、田出実は照ながらありがとうと言つた。

放課後、一年桃組の教室の前までやつて來た。いるかなと中をそつと覗くと、お田当ての人物はまだ教室に残っていた。

「千保さん」

クラスメイトと談笑している千保さんに呼びかける。彼女はそのクラスメイトに何か言つてから入り口に立つてゐる美香のもとへと來てくれた。

「珍しい。美香さん、どうかしたの？」

千保さんは中等部で同じクラスになつたことがある。その時は仲が良かつた。最近はそんなに会うこともなかつたが、相談相手として顔が思い浮かんだのが千保さんだつた。

「「めんね。ちょっと相談したいことがあるんだけれど、時間いいかな？」

「待つててね」

千保さんはそう言つとクラスメイトのところまで戻つていつた。よく見るとそのクラスメイトも千保さんと感じが似てゐる気がした。鞄を持つて現れた千保さんは、入り口でクラスメイトに手を振り、それから美香に向き直つた。

「どこ行く？」

向かつた先はミルクホール。放課後も少し時間が経つたのでがらがらだつた。相談料代わりのコーヒー牛乳を千保さんに渡した。

「ありがとう」

につこり笑つて受け取つてくれた。

二人は空いている椅子に腰を下ろし、向かい合つて座つた。美香は自分の分のコーヒー牛乳を一口飲んでから聞いてみた。

「千保さんは、白薔薇さまにチョコレート渡す？」

千保さんが白薔薇をまつアンであることはよく知っている。だから当然その返事は決まっていると思っていた。ところが。

「チョコレート? うーん、考えてなかつたから……」

「えつ!」

驚いた。牛乳パックから中身をこぼしそうになるくらいだった。

「バレンタインティーって、イベントがあるから」

もちろん新聞部と山百合会主催のイベントのことは知っている。
『リリアンかわら版』では号外まで出して大々的に宣伝しているし、
カードを見つけたら半日チケット券がもらえるとあって、教室でその
話題を聞かない日はないくらい盛り上がっている。特に中等部から
の進学組は去年参加できなかつたイベントへの期待が大きい。

「でも、イベントがあるからつて、チョコレートを渡すこととは関
係ないんじやない?」

素朴な疑問をぶつけてみた。

「イベントのことだけで頭がいっぱいいで、チョコレートのことまで
考える余裕がないっていつか……」「なるほど」

なんとなく分かつた。美香にとつてはチョコレートを渡すことが
その日のメインイベントだけれど、千保さんにとつてはイベントで
宝探しをすることがメインイベントなんだつて。確かに、バレンタ
インデーの思い出作りとしてはどちらも記憶に残るものになりそう
だ。

「美香さんは祐巳さまに渡すの?」

当然の質問である。美香が祐巳さまのファンであることは千保さ
んの知るところなのだから。

「……迷つてる。それを相談しに来たの」「なるほどね」

千保さんが頷いた。

「渡したいなら、渡しちゃえればいいじゃん」

気楽に言つてくれる。それが千保さんらしさだ。

「直接渡せないなら……、そうだ、靴箱の中に入れておくとか！」

紅薔薇さまは靴箱の中に入れてあつたものまで返したらしい。祐巳さまがそこまですることは思わないけれども。

ちょっとと思い付いたことがあつたので聞いてみた。

「千保さんは、白薔薇のつぼみに遠慮して渡さないの？」

「全然そんななんじやないって。私はただのミーハーだし。本当にチヨコレーートまで気が回らなかつただけだつて」

そういうものなのか。

「美香さんつて、もしかして妹の座、狙つてる？」

慌てて首を横に振つた。

「まさか。……私も、そんなんじやない」

ちょっと焦つた。なぜ焦つたのか自分でも分からなのが。千保さんはそれ以上追求しないでくれた。

5

「笙子さんは薦子さまにチヨコレーート渡すよね？」

田出実はリサーチと称してこのところ一年生の知り合いに聞き回つていて。記事にするためではない。3学期は記事のネタが豊富でこんなリサーチ結果を載せる隙間もないくらいだ。

むしろ、趣味と実益。

いろんな人から話を聞いて回るのは楽しみだつた。だから新聞部に入部したとも言える。一方で、自分がお姉さまにチヨコレーートをどう渡すかというなかなかイメージしにくいことの参考にもなりそうだつた。

笙子さんは考へ込んでいる。見た目はふわふわしたかんじのかわいらしき女の子だが、内面はかなりしっかりしている。写真部のエースと自称される薦子さまとは姉妹の関係ではないが、いつも一緒にいるので当然渡すものだと思っていた。

田出実の姉の真美さまと薦子さまはクラスメイトであり、新聞部

と「写眞部といつ」ともあって一緒に行動されることも少なくない。笙子さんと知り合ったのは秋以降だが、話す機会はその後けっこつあった。

「チョコレー^トとは限らないかな」
いたずらっぽく微笑んで答えた笙子さん。何か計画を思いついたようだ。

リサーチ結果を報告する相手に選んだのは乃梨子さんだった。本当はお姉さまにと思ったが、もともとそのお姉さまにチョコレー^トを渡すためのリサーチなのだから適切ではない。イベントも直前になり、慌しい作業に追われているさなかだが、ちょっと一服ということなので話すこととした。乃梨子さんにはいい迷惑かもしれないが、「お姉さまがいる一年生はもちろんお姉さまに、お姉さまがない生徒は憧れの先輩や山百合会幹部が対象みたい」

乃梨子さんは黙つて聞いてくれる。

「でも、今年は大きな異変が起きているの」
「異変って？」

「去年までの統計があるわけじゃないから実際はどれくらいか分からぬいけれど、チョコレー^トを渡さない一年生が増えているみたい」
残念ながら乃梨子さんを驚かせるほどの内容ではなかつたようだ。
「理由は、バレンタインイベントのせい」

チョコレー^トを渡さなくとも、特別なイベントがあるからそれで満足つてことみたい。特に中等部からの進学組は去年参加できなかつたから余計にそういう気持ちがあるかもね」

「中にはフライングで参加した人もいるみたいだけれどね」
笑つて乃梨子さんが言った。笙子さんや瞳子さんがそうだつたらしい。

「あと、次期薔薇さまがイベントのせいで忙しいことも理由みたい」
これはちょっと注意すべきことなのかもしない。

「黄薔薇さまは受験生だし、当口も受験があるので直接渡せないから、剣道部を中心には有志が取りまとめて由乃さまに渡してもらいたいね」

大掛かりなことだが、昨年も多くのチョコレートを渡されたらしい。半分くらいはホワイトデーのお返しに期待してらしいけれど。でも、今年は受験生だからお返しは期待しないでって取りまとめ役が言っているからどれくらい集まるかは分からない。

「紅薔薇さまは、去年も祐巳さま以外からのチョコレートはお断りになつたそうだから、今年もでしょうね。さすがにチャレンジャーもいなさそう」

ここまで噂が広まつていれば当然だろう。

「次期薔薇さま方へ渡したいって一年生はけつこうこるけれども、みんなどう渡すか頭を悩ませているみたい」

当口は朝から打ち合わせが予定されている。昼休みもおそらく薔薇の館に籠もり切りになりそうだし、放課後はイベントだ。渡すとしたらその後くらいかもしない。

「黄薔薇さまのところのように妹が関わるつてのも変だよね。あそこはまあ特別だし」

「確かに、志摩子さま宛てのチョコレートを渡されても困るかも」白薔薇さまがチョコレートをもらつても平氣そうな感じの乃梨子さんでも困るのか。イベントのせいでチョコレートを渡せなかつたと言われるのも嫌だけれど、かといつていい解決法も思いつかない。日出実にとってはそう深刻な問題ではなかつたから、そこでこの話題は打ち切つてしまつた。イベントまであとわずか。のんびりとばかりしてはいられないから。

チョコレートは完成した。徹夜まではしなかつたが、遅くまでかかつたのでまだ眠い。自信作とまでは言わないが、それなりに手ご

たえがある出来だ。当然紅い包装紙で包み、リボンを掛けてあとは渡すだけ。

美香の悩みは解決しなかつたが、さすがにバレンタイン直前となるとそれどころではなくなった。悩みが解決してもチョココレートができなければ話にならない。ようやく準備が整つて、再び悩みのことを思い出したところだった。

それでもまずは行動あるのみ。いつもより早く家を出て学校へ向かう。それなのに、リリアン女学園はいつもの朝とは明らかに違っていた。

当然といえば当然。特別な日だから。

マリア様の前もすでに混雑していた。これだとチョココレートの受け渡しに来ているカツプルも渡すタイミングがなかなかさそうだ。美香はこの賑わいを見て、もう少し早く登校すればよかつたと悔やんだ。

いつものように上履きに替える。いつもは教室に直行だが今日は一年生のところへ向かう。千保さんに言われたように靴箱の中にチョココレートを入れることを考えていたからだ。

人の流れが途切れた時を見計らつて、祐巳さまの靴箱を開けてみた。入っていたのは下履きの革靴だった。

(……残念)

祐巳さまは既に登校しているわけだ。今チョココレートを入れておけば、遅くとも帰るときには見つけてもらえる。でも、何時間も靴箱の中にチョココレートを入れておくのは躊躇われた。またしても、もう少し早く来ればよかつたと悔やんだ。

「のまま自分の教室に向かう気になれず、勇氣を出して一年生の教室の方へと向かった。気持ちが盛り上がりしている今ならチョコレートを渡せるかもしれない。

一年松組の教室の前の廊下は多くの生徒が行き交っていた。一年生とおぼしき生徒たちもかなりいた。そのすべてがつぼみ目当てで

はないだろうが、当然中には祐巳さまや由乃さまにチヨコレートを渡す目的の人がいると思われた。

美香は一年松組の教室の中を覗きたかったが、人が多くて思うようにならない。かといって取り次いでもらつほどの勇気は微塵もなかつた。どうしようかと思つていると、一年生たちの会話が耳に飛び込んできた。

「つぼみの方々はいらっしゃらないの？」

「もう薔薇の館へ向かわれたらしいわ」

「えー、ざんねーん」

「お忙しいそつよ。イベントの打ち合わせがあるつて話しだし」

美香も心の中で、ざんねーんとつぶやいた。イベント当日なのだからお忙しいに決まっていたのに大ぼけだ。やはりもつと早く来ればよかつたのだ。

自分の教室にとぼとぼと向かう。じつしょ。この様子だと休み時間もお渡しできるかどうか。チヨコレートの香りが充満している自分の教室に入るなり、美香はがっくりと肩を落とした。

休み時間のたびに一年松組の教室の前までは行つてみた。同じような目的と思しき一年生の姿も見た。でも、誰も取り次いで呼び出してもらつほどの勇気はなかつたようだ。これだけの人の目の前にチヨコレートを渡す勇気はなかなか持てるものではない。

昼休みはすでに薔薇の館に向かわた後だつた。薔薇の館のそばまで行つたものの、祐巳さまが出ていらつしゃるわけもなく、チヨコレートを渡せぬまま放課後になつてしまつた。

楽しいはずの特別な一日は、悶々とする時間ばかりとなつてしまつた。

何をしているんだろう。

そんな思いも湧き上がつてくる。それでも、掃除を終えると急いで薔薇の館の前の中庭へと向かう。千保さんとは違い、美香はイベ

ントにそれほど強い関心を持つていなかつた。万が一美香がカードを見つけてしまつても、いつたいデートで何を話していいか見当も付かない。でも、参加しないという選択肢は始めからなかつた。祐巳さまを間近で見るチャンスだし。

こんなに参加するのかとあたりを見て思つてしまつた。姉のいな一年生だけが参加とはもちろん考えていなかつたが、上級生も多いし、なにより姉のいる一年生も大勢いるみたいだつた。
ほとんどの人はゲーム感覚なんだろう。みんな楽しそうに始まるのを待つてゐる。美香は自分が場違いなどこにいるような感覚さえ持つてしまつた。

この中で半日デート券をゲットできるのは多くても三人だけ。そう思うと、自分がその三人に入る気がまつたくしなかつた。こんなことを考へてゐる時点で負けたようなものだ。

深くため息をついて、周囲を観察してみる。主役の次期薔薇さま方はまだ見当たらぬ。当然見知つた顔もちらほらと見かける。そんな中に意外な人物を発見した。

表情までは見えないがクラスメイトの瞳子さんが参加してゐた。あの縦ロールは人混みの中でもしっかりと目立つ。そんなに仲が良かつたわけではないが、長いリリアンでの生活の中で何度もクラスになつたことがあつた。しかし、高等部でのおよそ一年間で彼女に対する印象は大きく変わつた。

祐巳さまとの関係でさもざまな噂があつた。梅雨時のミルクホール事件。学園祭では山百合会の劇に参加してゐた。そして、衝撃の生徒会選挙への立候補。美香には瞳子さんが何を考えているのかまったく分からなかつた。一時は祐巳さまの妹候補ナンバーワンと言われ、美香は羨ましく思つたものだ。最近はクラスメイトともほとんど会話しなくなつた。乃梨子さんくらいだろう、親しくしてゐるのは。

瞳子さんは楽しそうには見えなかつた。むしろこの場から立ち去

りたいようにさえ見えた。この場にそぐわないという意味では、美香とよく似ているように感じた。

司会者は拡声器でイベントの詳細を説明している。それを聞き流しながら美香の目は祐巳さまに釘付けだった。いつもと変わらぬ輝きを感じていた。美香は祐巳さまを見ているだけで幸せだった。スタートの宣言から参加者が一斉に動き始めた。一目散に目的地へ向かう人。グループで行き先を話し合っている人。どこへ行くか決めかねてまだこの場に留まっている人。

ちらつと見えたが千保さんは合図と同時にどこかへ走り去った。楽しくてしようがないという風に見えた。美香はもちろん宛てなどなかったので、ぼんやりと立っていた。周囲の喧騒に取り残された感じだった。

ふと薔薇の館を見ると、祐巳さまが入り口のところでじっと何かを見ていた。その視線の先を追つと紅薔薇さまがいらっしゃった。ちょうどハンデキャップの5分間を終えゲームに参加されるところだった。

紅薔薇さまは一年生を数人引き連れて薔薇の館に向かわれた。美香もその後を追つた。

今なら薔薇の館に入ることができる。

昨年の秋に茶話会が開催された。姉妹の出会いの場を設けるという趣旨だったが、紅薔薇のつぼみと黄薔薇のつぼみが参加されるといつこと、両つぼみの妹選びの場だというのがもつぱらの噂だった。

美香も参加条件には当てはまっていた。薔薇の館の前まで行つたこともあった。その時は薔薇の館の扉が開かれていて、一階に受付が置かれていた。でも、中に入つて参加用紙をもらつことはなかつた。

薔薇の館という場所に臆してしまったことが理由の半分。残り半分は、参加する勇気がなかつたから。どうしても姉が欲しいと思っていなかつたし、たとえ祐巳さまとお話する機会があつても何を話していいか分からなかつた。

他の一年生たちの後に続いて薔薇の館に足を踏み入れた。中は決して広くはなかつたが、美香にとつて禁忌の場所だつたのでドキドキしてしまつた。学校内の他の施設とは異なる雰囲気が漂つているように思えた。

遅れないよう一階へと上がる。ギシギシと階段が音を立てた。今はまだ多くはないけれど、参加者の多くが上がつたら床が抜けたりしないかなと心配してしまつた。

ビスケットのような扉の先に、今日の主役の皆さまが勢揃いしていた。部屋に入るなんて畏れ多いと思ったが、いまさら引き返すわけにもいかないだろう。本当は紅薔薇のつぼみのそばに座りたかつたが、他の一年生にくつついて席を選んだ。

乃梨子さんから紅茶を振舞われた。学校ではない別世界にいるような気分になつた。他の一年生たちが紅薔薇さまや祐巳さまに話しあげ、それに答えてくださるのを見ているだけで美香は十分だつた。いつの間にかチョコレートのことはすっかり忘れててしまつていた。

薔薇の館は田まぐるしい舞台劇が行われているようだ。黄薔薇さまの登場や由乃さまのカードの発見に心躍らされた。矢継ぎ早に様々な出来事が起きて、ゆっくり考えるゆとりなくなつてしまつた。

その上、何度も席を替わるうちに、祐巳さまの近くに座ることができた。今までこんなに近付いたことはなかつた。ドキンドキンと高く波打つ心臓の鼓動まで聞かれてしまつんではと思つほどだつた。田くるめく時間はあつという間に過ぎてしまつ。紅薔薇さまが残り5分になつてからカードを見つけると仰られ、残り時間がもうわずかということに気づかされた。気高く自信に満ちた紅薔薇さまが

カードを見つける。この舞台劇のラストを飾るのにこれほど相応しい幕切れはないと思った。この近くに紅いカードが隠されているとしても、美香は自分で見つけようとはもう思わなかつた。

紅薔薇さまと祐巳さま、このお一人の絆の強さがうかがわれるやりとりを聞いているだけで美香は幸せだつたから。

思い返せば新入生歓迎会でも間近で見ることができた。何が起きたかよく分からなかつたが、白薔薇さまや乃梨子さんのやり取りに無性にドキドキした。美香にとって山百合会は観覧するものだつた。自分が一緒に舞台に立とうとは思わない。

クライマックスという場面で更なる展開が用意されていた。もちろん誰かがシナリオを書いたわけでもないだろう。しかし、この大どんでん返しはマリア様の御心なのかもしれない、と後に思ひつゝになつた。

扉が開く大きな音に驚き、小さな身体で大きな音を立てて歩く姿に驚き、今まで見たことのない瞳子さんの表情に驚いた。鬼気迫るなんてもんじやない。普段何かしら演じているような雰囲気を漂わす瞳子さんが、すべてをさらけ出していくように見えた。

周囲の驚きも一切気にせず、ただ祐巳さまを見て言つた。

「私を、祐巳さまの妹にしていただけませんか」

美香は頭の中が真っ白になつた。

薔薇の館でのことは夢だつたのかと思つてしまつほど、なにか現実離れしていた。

どれだけ時間が経つたかよく分からなかつたが、いつの間にか中庭で結果発表をぼんやりと見ていた。紅薔薇さまのカードの発見者が瞳子さんと紹介されて、夢ではなく現実だつたと思つた。

しばらくはこの噂で持ちきりになりそつた。その現場を特等席で見ていたわけだ。でも、今日の出来事を他人に話したいとは思わない。宝石のような時間を含めて、胸の奥にしつかりとしまつておき

たかつた。

少し気分が落ち着くと、今度はいろんなことが頭を渦巻くようになつた。カードは本当に瞳子さんのものでよかつたのだろうかとか、これで祐巳さまは瞳子さんを妹にしてしまうのだろうかとか、私は見ているだけで本当に良かつたのだろうかとか。

イベントはつつがなく幕を閉じ、次期薔薇さま方がチョコレートを配つてしているのが見えた。美香は列が途切れるまで待つて、今日ずっと話し掛けられなかつた祐巳さまにいくつかの質問をしてみた。祐巳さまは美香の質問にちゃんと答えてくれた。それが嬉しかつた。ペコリと頭を下げて走り去る。もうチョコレートを渡す気はなくなつていた。

その夜。

美香は自分の部屋で一人チョコレートを食べた。祐巳さまの好みに合わせて思いつきり甘く作つたはずなのに、ちょっとビターな味だった。

(後書き)

祐巳がバレンタインで一年生からわずか2個しかチョコレートをもらわなかつたことが不満でした。それへの私なりの解釈といったところでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3281f/>

ビター・チョコレート 一年生たちのバレンタイン

2010年10月8日15時16分発行